親が勉強を教えている

―子どもの学力格差を生む親の意欲格差―

研究開発室　松田 茂樹

―要旨―

① 小中学生が学校以外で勉強する時間をみると、勉強時間が長い子どもと短い子どもに分かれている。その傾向は、中学生で大きい。勉強時間の差は、学力の差となる。

② 父親・母親が勉強を教えることが多いほど、子どもの勉強時間は長い。

③ 親の学歴や経済力の差以上に、親が子どもの勉強を教える頻度の差や親の意欲の差が、子どもの学力格差につながっている。

1. 学力格差を生む背景

本稿では、家庭環境と小中学生の勉強時間の関係を明らかにする。注目する家庭環境は、親が子どもに勉強を教えることの有無と親の学歴と経済力である。具体的には、第一に、どの程度の頻度で、親が子どもに勉強を教えているかを明らかにする。第二に、親が勉強を教えることが、子どもの勉強時間に与える影響を分析する。第三に、親が子どもに勉強を教えることと親の学歴、経済力のいずれが、子どもの勉強時間に及ぼす影響が強いかを明らかにする。

研究の背景は次のとおりである。近年、子どもの学力低下が、社会的に問題視されている。内閣府（2001）によると、1995年と2000年を比べた場合、中学生が学校以外で勉強する時間は大幅に減少している*[1]。他の条件が同じ場合、学校以外で勉強する時間が短いほど、子どもの学力は低下する。

学力低下は、学力格差の拡大をともなって、進行している。特に親の学歴や経済力等が低い子どもが勉強をしなくなってきており、親の学歴や経済力等の高い子どもとの間に、学習意欲の格差――「インセンティブ・ディバイド」（苅谷 2001）が生じているとされる。

親の学歴や経済力等による子どもの学習意欲の差は、勉強という個人的な活動が、家庭環境によって大きく左右されていることを物語る。ただし、これまでわが国の教育研究では、もっぱら親の学歴や職業が子どもの学習に与える影響が分析され、論じられてきた（岩永 1990、苅谷 2001、本田 2004）。だが、子どもの学習を支える家

庭環境には、それ以外に、親が直接子どもに勉強を教え、支援することもある。現在、どの程度の親が子どもに勉強を教えており、そのことが子どもの勉強にどのような影響を与えているのだろうか。本稿では、この点を分析する。

以下では、まず、子どもの学校以外における勉強時間や進学希望等の現状を示す。次に、父親・母親が子どもに勉強を教える頻度をみる。さらに、家庭環境と子どもの勉強時間の関係を分析する。

2. 調査概要

分析に使用するのは、当研究所が、今年３月に中学生までの子どもがいる家庭の父親、母親、子どもを対象に実施した「子どもの生活に関するアンケート調査」である（調査概要は本号の TOPIC『「子どもの生活に関するアンケート調査」の結果概要』を参照）。

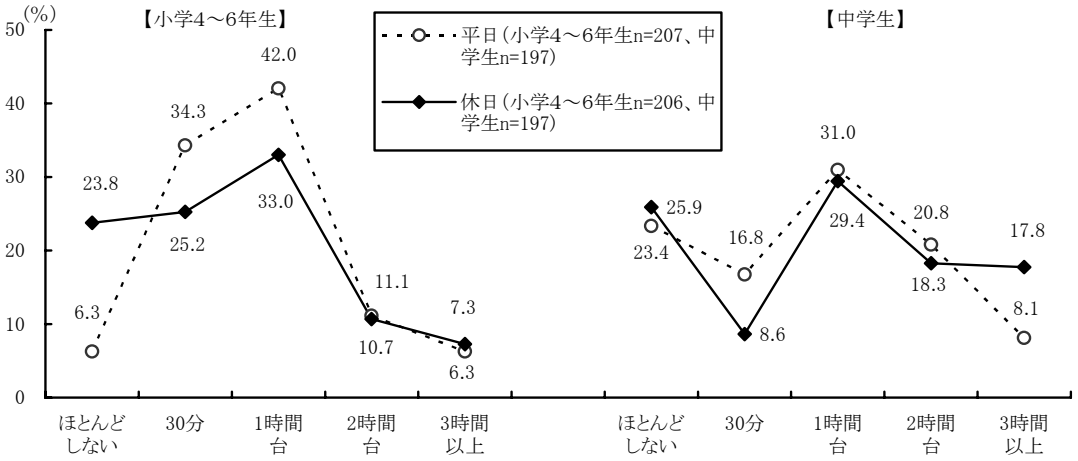
以下の分析では、小学４～６年生と中学生の子どもおよび彼らの父親・母親のサンプルを使用する。子どもの学習状況と父親・母親の勉強への関わりを分析するため、同一世帯の父親、母親、子どもの３者それぞれに対するアンケート調査を組み合わせた404世帯分のデータセットを分析した。

3. 子どもの勉強の様子

(1)平日と休日の勉強時間

はじめに、子どものふだんの学習の様子をみてみたい。平日と休日の学校以外での勉強時間（塾を含む）の分布が図表１である。

図表１　平日と休日の学校以外での勉強時間(就学状況別)



注：小学４年生～中学生の回答結果

小学４～６年生についてみると、平日は１時間台が42.0％と最も多く、次いで30分が34.3％である。平日と休日を比べると、休日の方が勉強時間は短い。休日は、４人に１人が勉強を「ほとんどしない」と回答している。

小学４～６年生よりも中学生の方が、勉強時間が長い子どもと短い子どもに分かれている。男女別にみると、小学４～６年生・中学生とも、勉強する子どもと勉強しない子どもに別れる傾向は、男子で強くみられる（図表省略）。すなわち、ほとんど勉強しない子どもは男子に多いが、長時間勉強する子どもも男子は多い。

（2）勉強時間と成績の関係

学校以外での勉強時間とクラスでの成績は関係するのだろうか。平日と休日の勉強時間の長さが、30分以内、１時間台、２時間以上の３つのグループに分けて、各グループの子どものクラスでの成績を分析した（図表省略）。

その結果、小学４～６年生の場合、成績が「とてもよい」と回答した割合は、平日の勉強時間が30分以内の子どもは16.7％であるのに対して、１時間台の子どもは19.5％、２時間以上の子どもでは44.4％であり、勉強時間が長いほどクラスでの成績がよい子どもが多かった。休日の勉強時間についても、同様の関係がみられた。

中学生でも、成績が「とてもよい」と回答した割合は、平日の勉強時間が30分以内の子どもは3.8％であるのに対して、１時間台の子どもは14.8％、２時間以上の子どもでは31.6％である。休日についても、勉強時間が長い子どもほど成績のよい子どもが多かった。

（3）進学希望

小中学生に、どの段階の学校まで進学したいと思うかをたずねた結果が図表２である。小中学生とも、大学・大学院への進学希望は高い。大学・大学院への進学を希望する割合は、小学４～６年生では、男子が57.5％、女子が45.0％である。同じく、中学生では、男子が75.0％、女子が51.9％である。

男女を比較すると、女子よりも男子の方が、大学・大学院への進学希望をもつ子どもが多い。また、男女を比較した際の特徴として、男子では、進学希望が二極化していることがあげられる。

大学・大学院への進学希望をもっているか否かによって、学校外での勉強時間は異なる。学校以外での勉強時間は、小学４～６年生の場合、進学希望が高校・専門学校・短大の子どもは平日0.9時間、休日0.7時間であるのに対して、進学希望が大学・大学院の子どもは平日1.3時間、休日1.2時間である（図表省略）。中学生の場合、その差はさらに大きい。学校以外での勉強時間は、進学希望が高校・専門学校・短大の子どもは平日0.9時間、休日0.8時間であるのに対して、進学希望が大学・大学院の子どもは平日1.4時間、休日1.3時間である。

図表2　どの学校まで進学したいか（性・就学状況別）

（単位：%）

	n	高校	専門学校	短大	大学	大学院	その他	特に希望はない
小学4～6年生　男子	106	20.8	5.7	0.9	50.0	7.5	0.9	14.2
小学4～6年生　女子	100	14.0	18.0	5.0	37.0	8.0	1.0	17.0
中学生　男子	116	13.8	3.4	0.0	64.7	10.3	0.9	6.9
中学生　女子	79	15.2	19.0	10.1	49.4	2.5	1.3	2.5

注：小学４年生～中学生の回答結果

4. 子どもに勉強を教える親

次に、親側の回答結果から、親が子どもの勉強や身の回りの世話をどの程度行っているかをみたものが図表３である。これは、父親と母親のそれぞれが、本人のことについて回答した結果である。

中学生よりも小学４～６年生の方が、父親・母親が勉強や身の回りの世話を行うことが多いことがわかる。父親・母親が勉強を教える週あたりの回数は、小学４～６年生の場合は父親が0.8回、母親が3.3回であるが、中学生の場合は父親が0.5回、母親が1.0回である。なお、父親・母親とも、学歴、就労形態、父親の年収によって勉強を教える頻度に大きな差はみられなかった（図表省略）。

学校での勉強のことについて親子が話す頻度も、小学４～６年生の場合は父親が1.9回、母親が4.9回であるが、中学生の場合は父親が1.7回、母親が4.0回である。

父親・母親の関わり方を比較すると、いずれの頻度も、母親の方が多い。父親が比較的行うことが多いのは、子どもと学校の友達のことや遊びのことについて話すことである。

図表3　父親・母親が子どもに勉強を教えることやいっしょに遊ぶ週あたりの頻度（就学状況別）

（単位：回/週）

	小学4～6年生(n=207)		中学生(n=197)	
	父親	母親	父親	母親
子どもに勉強（読み書きを含む）を教える	0.8	3.3	0.5	1.0
子どもといっしょに遊ぶ	1.5	2.1	0.8	1.1
子どもの食事、着替えなど身の回りの世話をする	1.2	6.6	0.8	6.0
子どもと学校での勉強のことについて話す	1.9	4.9	1.7	4.0
子どもと学校の友だちのことや遊びのことについて話す	2.1	5.6	1.9	4.8

注：小学４年生～中学生の子どもを持つ親の回答結果

5. 勉強時間の長さを左右するもの

（1）父親の学歴と年収

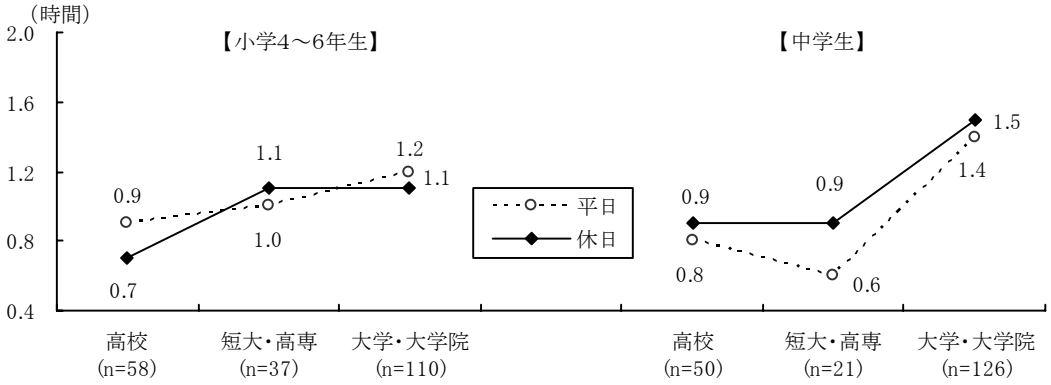
続いて、子どもの勉強時間の長さを左右している要因を分析した結果を示す。既存

研究では、親の学歴や経済力等が低い子どもよりも高い子どもの方が、勉強時間が長く、成績もよいことが指摘されている。まず、親の学歴と経済力について、本データにおいても同様の結果がみられるか確認する。

父親の学歴別にみた子どもの平日と休日の勉強時間が図表４である。小学４～６年生についてみると、父親が高卒の子どもよりも、大学・大学院卒の子どもの方が、勉強時間が長い。中学生でも、父親が大学・大学院卒の子どもの勉強時間は長い。母親の学歴別にみても、同様の関係はみられる（図表省略）。

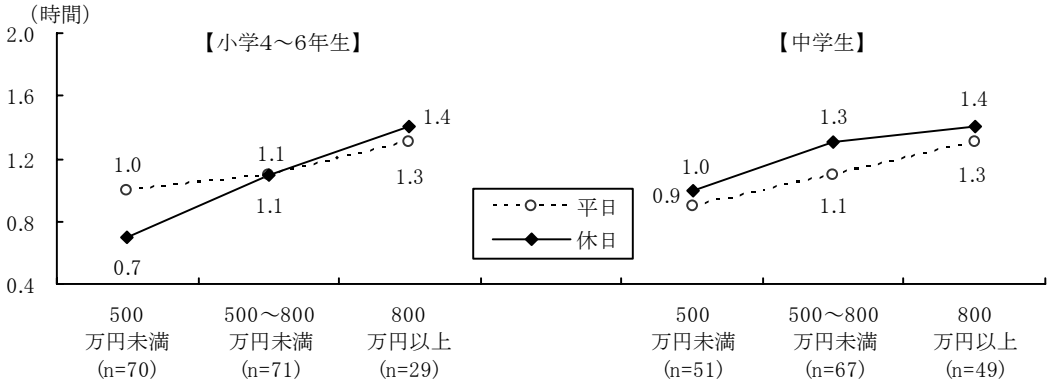
父親の年収の違いによる子どもの勉強時間の差を分析した結果が図表５である。父親の年収が高いほど、平日、休日とも、子どもの勉強時間は長い。この関係は、子どもが小学４～６年生でも、中学生でも、同様にみられる。

図表4　父親の学歴別にみた平日と休日の勉強時間（就学状況別）



注：勉強時間は小学４年生～中学生の子どもの、学歴はその子どもの親の回答結果

図表5　父親の年収別にみた平日と休日の勉強時間（就学状況別）



注：勉強時間は小学４年生～中学生の子どもの、父親の年収はその子どもの親の回答結果

（2）父親・母親が勉強を教えること

既存研究の指摘と同様に、本データでも、父親・母親の学歴および父親の年収が高

い子どもほど、勉強時間は長いことが確認された。しかし、子どもの勉強時間を左右する家庭環境の要因は、学歴や経済力等のみであろうか。本稿では、父親・母親が子どもの勉強の世話をする頻度をみてきたが、これもまた子どもの勉強時間の長さを強く左右している可能性がある。そこで、次に、父親・母親が勉強を教える頻度と子どもの勉強時間の長さの関係を分析したい。

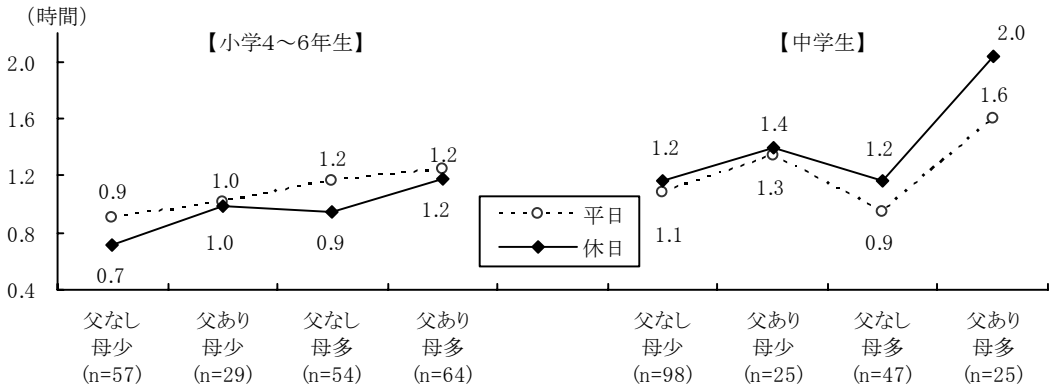
父親・母親が勉強を教えること別にみた平日と休日の勉強時間が図表６である。ここでは、父親が勉強を教えることの有無と、母親が勉強を教える頻度の多寡（小学４～６年生の場合は週３日以上か否か、中学生の場合は週１回以上か否か）によって４つのグループに分けた上で、グループごとに子どもの平日と休日の勉強時間を比較した。

小学４～６年生の場合、（勉強を教えることが）「父なし・母少」グループの子どもの勉強時間は、平日が0.9時間、休日が0.7時間と短いのに対して、「父あり・母多」グループの子どもはそれぞれ1.2時間、1.2時間と長い。中学生の場合も、「父あり・母多」グループの子どもは、それ以外のグループの子どもよりも、平日、休日とも勉強時間が長くなっている。すなわち、父親・母親が子どもに勉強を教えることが多い家庭ほど、子どもの勉強時間は長い。

父親が勉強を教えることの有無と母親が教えることの頻度の影響を比べると、父親の影響の方が強い。先述のように、勉強を教える頻度は、母親よりも父親の方が少ない。しかし、父親が教えているか否かで、特に中学生は子どもの勉強時間に大きな差が生じている。

ここで、父親・母親が勉強を教えている家庭は、子どもに勉強を無理強いするために、勉強時間が長くなっているのではないかという点が懸念される。もしそうであれば、父親・母親が教えることが多いほど、子どもは勉強が楽しくなくなるはずである。

図表６　父親・母親が勉強を教えること別にみた平日と休日の勉強時間（就学状況別）



注１：勉強時間は小学４年生～中学生の子どもの、父親・母親が勉強を教えることはその子どもの親の回答結果
注２：母親が勉強を教える頻度が、小学４～６年生の場合は週３日以上か否か、中学生の場合は週１回以上か否かで分類

しかし、本データを分析すると、父親・母親が教えることが多い家庭ほど、子どもが「勉強は楽しい」と答えている割合はむしろ高かった（図表省略）。このため、先の懸念はあたらなかった。

(3)親の学歴、父親の年収と親が勉強を教えることのどちらの影響が強いか

以上から、父親・母親の学歴および父親の年収が高い家庭の子どもほど、勉強時間が長いことがわかった。父親・母親が勉強を教えることが多い家庭の子どもほど、勉強時間が長いこともわかった。それでは、子どもの勉強時間の長さに与えている影響は、親の学歴、父親の年収と親が勉強を教えることのいずれが強いだろうか。

各要因の影響を比較するために、子どもの勉強時間を被説明変数とし、父親・母親の学歴、父親の年収、父親・母親が勉強を教える頻度（図表６の４グループ）、性別、学年を説明変数とした重回帰分析を行った(図表省略)。

その結果、総じて父親・母親の学歴や父親の年収よりも、父親・母親が子どもに勉強を教える頻度の方が、子どもの勉強時間の長さに強い影響を与えていた。

なお、学習塾に通う子どもの方が、学校以外での勉強時間は長い（図表省略）。父親・母親が勉強を教えることが多い家庭の子どもは、学習塾に通ってもいる。そのため、父親・母親が勉強を教えること自体が子どもの勉強時間を長くしているのではなく、そうした子どもは学習塾での勉強時間が長くなっているという可能性も考えられる。だが、学習塾の影響を取り除いても、小学４～６年生の場合は、親が家庭で勉強を教えることが多いほど、子どもの勉強時間は長くなっていた。

6. 親の意欲格差が問題

本稿の分析から、次の点が明らかになった。第一に、小中学生、特に中学生では、勉強する子どもとしない子どもの差が大きいことが見出された。平日の勉強時間が、１日３時間以上の子どもがいる一方で、ほとんどしない子どももいる。特に休日の勉強時間の個人差は大きい。また、男女を比較した場合、男子の方が勉強する子どもとしない子どもの差が大きい。他の条件が同じであれば、当然、勉強をしない子どもよりもする子どもの方が、成績はよくなり、より高い水準の学校へ進学することが可能になる。

第二に、父親・母親の学歴や父親の年収が、子どもの勉強に影響を与えていることが確認された。父親・母親の学歴や父親の年収が高い子どもの方が、勉強時間は長い。これは、家庭の学歴や経済力等の差によって、子どもの勉強行動や勉強する意欲の差が生じているという既存研究の指摘と合致する。

ただし、子どもの勉強に影響を与えているのは、親の学歴や父親の年収のみではない。第三に、父親・母親が子どもの勉強をみる頻度が多いか否かが、親の学歴や父親

の年収以上に子どもの勉強時間の差を広げる要因になっていることが見出された。父親・母親の学歴が高い子どもほど勉強時間は長い傾向があるが、親が高学歴でも勉強をサポートしていなければ、子どもの勉強時間はそれほど長くはならない。

近年における子どもの学力格差は、子どもの学習に対する意欲格差の広がりから生じていることが指摘されている（苅谷 2001）。子どもの意欲格差の背景には親の学歴や経済力等の差があり、ゆとり教育は期せずしてその階層の影響を強めることになったといわれる。しかし、本稿の分析結果をふまえると、この間に広がっていたものは、子どもの側の意欲格差のみではないかもしれない。子どもの勉強を親がどの程度支えているかという格差やそれを行おうとする＜親の意欲格差＞の広がりも、子どもの学力格差を拡大させた大きな要因として存在しているとみられる。

従来、子どもの学力格差が親の学歴差等と結びついている点を指して、不平等が再生産されているという議論がなされてきた。しかし、子どもの学力格差が、自らの子どもに勉強を教えようとする親の意欲格差から生じている場合、これも従来の議論の延長線上で捉えられるのだろうかという疑問が生じる。

（研究開発室　主任研究員）

【注釈】

*1 Benesse 教育研究開発センター（2006）は、1990年から2006年にかけて小中高校生が学校以外で勉強する時間は、クラスでの成績が下位の者で特に減少していることを報告している。

【参考文献】

・岩永雅也，1990，「アスピレーションとその実現――母が娘に伝えるもの」岡本英雄・直井道子編『現代日本の階層構造④女性と社会階層』東京大学出版会：91-118.

・苅谷剛彦，2001，『階層化日本と教育危機――不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂高文社.

・内閣府，2001，『日本の青少年の生活と意識――第２回調査青少年の生活と意識に関する基本調査報告書』.

・本田由紀，2004，「『非教育ママ』たちの所在」本田由紀編『女性の就業と親子関係 ── 母親たちの階層戦略』勁草書房：167-184.

・Benesse 教育研究開発センター，2006，『第４回学習基本調査国内調査――子どもの学習実態や意識はどのように変化したか？』.